

2016年2月14日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記9章1～9節

説教：神の目と心が注がれるところ

はじめに

2月28日に2016年度の予算総会が開かれ、そこで教会のこれからの歩みについて大切なことが決められていきます。2016年度を教会はどのみことばを目当てに歩んでいくのか。その聖句として、3節後半のみことば、「わたしは、あなたがわたしの名をとこしえまでもここに置くために建てたこの宮を聖別した。わたしの目とわたしの心は、いつもそこにある。」これを道標聖句に掲げたいと思っております

今日はその意味を考えていくのですが、その前にこおにはどんな背景があったのか、そのことから見ていきます。

1 ソロモン

1)ダビデからイスラエルの王の指名を受ける

ダビデは、国を治めるということにかけては高い能力を持っていた人でした。けれども、子どもを育てることに関しては理想的な親からほど遠かったと言えます。その弱さは世継ぎ争いという問題に吹き出していきます。当時、世継ぎの権利は長男が持っていた訳ですが、その長男のアムノン、弟アブシャロムに暗殺されてしまいます。そしてアブシャロムは、力づくで父親ダビデ殺し、イスラエルの王となろうとするのですが、結局、彼はダビデの部下に殺されてしまいます。争いはそれで終わりません。

ダビデが年老いたとき、再び事件が持ち上がります。今度はアブシャロムの弟アドニヤ

が勝手に王となろうと動き出します。これを知ったダビデはあわててソロモンをイスラエルの王の後継に正式に指名する。これでやっとダビデ家の跡目争いに決着をつけることになりました。

2)ダビデの遺言(2章3,4節)

ダビデは、若いソロモンにいくつかの遺言を残します。その中から2章3,4節を見えます。「あなたの神、主の戒めを守り、モーセの律法に書かれているとおりに、主のおきてと、命令と、定めと、さとしを守って主の道を歩まなければならない。あなたがた何をして、どこへ行っても、栄えるためである。そうすれば、主は私について語られた約束を果たして下さるだろう。すなわち『もし、あなたの息子たちが彼らの道を守り、心を尽くし、精神を尽くして、誠実をもってわたしの前を歩むなら、あなたには、イスラエルの王座から人が漸たれない。』」

そうしてダビデは、自分が果たすことのできなかった神殿の建設事業の夢をソロモンに託して地上の生涯を閉じます。ソロモンは、ダビデの死後およそ20年経って神殿を完成させます。そのとき主がソロモンに現れ、いろいろなこととお語りになります。それが今日の箇所になります。

2 主の約束

1)神の約束を守るならイスラエルの王座から人が漸たれない

4,5節は、ダビデがソロモンに語ったこ

とばがそのものです。それだけ大事なポイントだということになります。ひとことで言えば、「もし神の約束をきちんと守って歩むならばイスラエルの国の王座は永久に確立する。」つまり、未来にわたって安泰であると言っているようです。

それはよいのですが、5節の文章はなんだか不思議な言い方に聞こえます。「あなたには、イスラエルの王座から人が漸たれない。」意味はなんとなくわかりますが、普通このような言い方はしません。原文がそうなりますから翻訳が悪いというわけではありません。あえて素直な言い方に直すとこうなるでしょう。「あなたの子孫は、永遠にイスラエルの王座に就きます。」

こう言い直すと、これはいったい誰のことか、ぴんと来ると思います。ダビデの子孫として来られるイエス・キリストのことを指していると見ることができます。そうしますと、4、5節の内容をひとことでまとめるとこうなります。「ソロモンが神の前を忠実に歩んだならば、救い主がイスラエルの王座に永遠に就きます。」では、実際にはどうだったのでしょうか。

2) もしほかの神々に仕えるなら

確かにソロモンは神殿をりっぱに建てました。神さまがソロモンに、「あなたは何を願うか」と問われたときも、彼は地位や名誉を求めない。民たちの声を聞き分けることのできる智慧を与えてくださいと願い、それは神のみこころにかなったともあります。信仰者として申し分ないように見えます。では、いつもそうであったのかというと、実はそうではない。大きな問題を抱えていました。二つのことを挙げておきます。

一つは経済的な面です。このあとの10節以降に出てきますが、ソロモンが神殿と自分が住む宮殿を建てるときに、外国から莫大な借金をしております。それはいい。ところが彼はその借金を半分しか返さないでそれで済ましてしまうのです。

また、極端に安い賃金で雇われた在留異国人たちが繁栄を陰で支えていたこともわかっています。モーセの律法に、「在留異国人を苦しめてはならない」(出エジプト記22章21節)とあるのですが、ソロモンはこれをよく守っていたとは思われないのです。

彼の弱さは結婚生活にも現れてきます。当時、隣の国との間で戦争が起きないように、日本の戦国時代と同じで、政略結婚が盛んに行われていたそうです。ソロモンもその例に漏れず、政略結婚による奥さんが700人もいたと言われます。人数を聞いて驚きますが、問題は別の所にあります。妻は、自分の国で信じていた信仰をもってイスラエルにやって来れるのですが、ソロモンはそのままにさせておく。実はそれも大きな問題なのではない。奥さんの影響を受けてソロモンも異教の神を拝むようなことをしてしまった。それが大きな問題だったのです。結局、このことがあとあと尾を引いて、後にイスラエルは二つの国に分裂することになります。二つに分裂することは国の力がそれだけ弱くなることを意味します。バビロン帝国が侵入してきて、イスラエルに滅ぼされてしまいます。

警告がなかったのではない。主はこう言っていた。6節から7節。「もしほかの神々に仕え、これを拝むなら、わたしが彼らに与えた地の面から、イスラエルを断ち、わたしがわたしの名のために聖別した宮を、わたしの前から投げ捨てよう。」

ソロモンはこのことばに背いてしまいます。その結果、主が預言したとおりにソロモンが建てた神殿は、彼の死後およそ 400 年たってバビロン軍によって破壊されてしまいます。

では、5 節の約束はどうなってしまったのでしょうか。ソロモンが失敗したのですから、もうイスラエルの王座から人が断たれてしまった。それで終わりということでしょうか。

3 主の宮

1) こわされた神殿

普通はそういうことになります。でも、先ほど言いました。5 節の「あなたには、イスラエルの王座から人が断たれない。」これは救い主のことを指している。ソロモンは失敗したけれど、主は約束どおりに救い主を送ってくださいましたことになりました。

いったいどのようにして主は王座に就かれるのでしょうか。実は、このことも主が語っていました。7 節。「わたしが彼らに与えた地の面から、イスラエルを断ち、わたしがわたしの名のために聖別した宮を、わたしの前から投げ捨てよう。」

このなかの「わたしがわたしの名のために聖別した宮。」これは何か。ソロモンが建てた神殿は、実際にバビロン軍に破壊されてしまいましたから、主がそのことを指して言っている事は明らかです。

では、それがすべてなのか。イエスがこう言われたことを思い出します。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」「しかし、イエスをご自分のからだのことを言われたのである。」(ヨハネ 2 章 19, 21 節)

主がソロモンに語ったみことば。「わたし

が聖別した宮を、わたしの前から投げ捨てる。」このことばは何を語っていたのか。ソロモンは罪を犯して主の約束を守れなかったけれど、実はそのことによって救い主がご自分のからだを投げ出すことになった。少し冷めた言い方をするなら、ソロモンが失敗することは神さまにとって織り込み済みだったのです。ソロモンが失敗したから、なおさら主の十字架は確かなものとなっていった。そうも言えるのです。

2) キリストのからだとして整えられる教会

今日の箇所は、今の私たちのこととして言えば、キリストのからだである教会に、主は今もご自身の目と心を注いでくださると約束しています。そこだけ見れば、「ああ良かった」で済ませられるのですが、主は繰り返し命じます。4 節。「まったき心と正しさをもって主の前を歩み、わたしがあなたに命じたことをすべてそのまま実行し、わたしのおきてと定めを守りなさい。」何度も言います。ソロモンでさえできなかった命令です。

私たちはどうでしょうか。なかにはこのように言う方がいます。「私たちは律法をきちんと守るべきだ。守れるように努力すべきだ。」仮に私たちの努力によって律法が守れるとしたらどうなりますか。神殿は投げ捨てられないことになります。イエスが十字架におつきになる必要はなくなる。救い主がいらないことになります。

そもそも、ソロモンは最初から完全に律法を守れると思っていたのか。いいえ。ソロモンも自分が罪人であることを認めていました。それでももし自ら反省し、悔い改めるなら主に立ち返るなら、主は罪を赦してくださいと、自分の口で告白していました。

私たちもソロモンと同じ罪人です。それなのに主は、罪人である私たちをご自分の宮に集めてくださり、主の心と目を注いでくださると約束します。

私たちは、2016 年度、このみことばを道標聖句に掲げて歩んでまいります。主が目と心を注いでくださる教会です。どれほどに大切に思われているのだらうと改めて考えさせられます。

ここ数年、感謝なことですが礼拝に出席される方の人数が増えてきました。そのためにもっともっと建物を使いよくしたり、いろいろな配慮をしなければならない時期に来ていると感じています。それは宮を管理することとして大切な働きであらうと思います。

そしてなによりも、この教会に主が心と目を注いでくださっていること。そして私たち罪人のために教会に集められてくださり、罪人のために主がみからだを投げ打ってくださったこと。その恵みを仰ぎ見ながら歩いていきたいと願います。